

県中教研 英語部会だより

第 41 号

発行日 令和8年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 塚田亜由美
題 字 金山 泰仁 先生

小学校や高等学校における指導との接続

指導主事 佐藤 宏樹

学習指導要領では、指導計画の作成に当たっては、小・中・高等学校を通じた領域別の目標の設定という観点を踏まえ、小学校や高等学校における指導との接続に留意することが必要であると記されています。また、実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際は、言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行うこと、小学校第3学年から第6学年までに扱った簡単な語句や基本的な表現等の学習内容を繰り返し指導し定着を図ることとの記載があります。

今年度、中教研研究大会や学校訪問研修等で授業を参観しました。魅力的な言語活動が多くの授業で設定されており、生徒が小学校での既習事項を含めた言語材料を自分で取捨選択し、生き生きと自分の思いや考えを伝える姿が印象に残りました。また、生徒の実態に応じ、ICTの効果的な活用や、ALTが2名参加して行うTTの工夫により、授業で英語に触れる量を確保し、言語活動の目的や言語の使用場面を意識して活動できるよう配慮された授業実践をたくさん見る機会を得ました。

中学校において、生徒自身が既習の表現等を駆使しながら社会的な話題に関する生徒自身の考えや気持ちを理由等とともに話して伝える力を養うことは、高等学校において、他者との関わりの中で幅広い話題について自分自身の立場や考えを適切に表現する力につながっていくと考えられています。生徒に外国語を活用する動機付けを行うこと、そして、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる言語活動を継続的に行っていくことが、求められる資質・能力を育成することにつながります。

生涯を通じた主体的な学習者を育むためにも、研究大会等の研修の機会を最大限に活用し、生徒の未来の姿を考えた授業実践が行われることを期待します。

(東部教育事務所)

言語活動で何を大切にするか

部長 塚田亜由美

第69回富山県中学校教育課程研究大会では、いずれの会場でもICTの効果的な活用がみられた。検索や翻訳ツールの使用だけにとどまらず、生成AIを用いたQA活動やアプリで自分の発音を確認するなどICTの使用目的も多様化し、授業のニーズにも対応してきている。また、オンライン上で互いの考えを瞬時に共有したり、教員が生徒一人一人の進捗を確認して助言したりできるようになり、ICTが生徒たちの個別最適で協働的な学びを実現させる手段として活用される場面もみられるようになった。まさに私たちは、紙とデジタル、人（教員・生徒）とAIを融合させて授業改善に取り組み、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成に取り組んでいる。

私は、自身の英語力向上のために、ALTには英語で話しかけている。会話の中には語彙や文法の間違いが多々あると思うが、彼は、私が話すことを理解しようとして聞いてくれる。そして、彼が自分の考えを伝える中で、私のミスさをさりげなく修正するのが分かる。もし、彼が私が話す内容ではなく、私のミスのみを指摘したらどうだろうか。多分、私は英語を使用しなくなるだろう。彼との会話は楽しいし、安心できる。だから、また英語で話しかけようと思う。そう考えたとき、私は自分の授業を振り返った。生徒たちの誤りを正すことに終始し、相手を理解したり、対話を楽しんだりすることを第一に考えていなかったかもしれない、と。もちろん、間違いを正してほしいと思う生徒がいることは確かだが、一方で、互いの思いを理解し、新たな対話が生まれることの楽しさを重視することで、意欲的に取り組もうとする生徒が増えるのではない。

今年度の授業力向上アドバイザー、文教大学の阿野幸一先生は次のように言われた。「何色が好き？」と尋ね合えるのは、英語の授業ぐらいですよ。普段中学生がそんな会話をしないでしょ。よりよく他を知ることができるのは英語の授業ならではのよ。」と。今、新しい情報や他の考え方を知ることの楽しさを求めることにもっとウエイトを置き、言語活動を仕組んでいきたいと考えている。

(高・福岡中)

第69回研究大会報告

新 川 地 区

(魚・西部中)

1 研究授業

村崎恵利佳教諭とALTトレバー・ダンジェロ先生、アザン・アクバル先生が、台湾の学生との交流で、日本で人気のある著名人や歌手、キャラクター等を紹介する準備をしようという学習課題を設定し、1学年で研究授業を行った。帯学習で行った「一問一答シート」での疑問文のやり取りで、相手から情報を引き出す練習をしたことが、その後のペア活動に生かされていた。また、ALT2名がチームを組んで机間指導したり、中間発表での対話役を行ったりしたときに、ALTが生徒の誤りに対してその場で言い直しをさせるなど、細やかな指導をしていた。それにより、生徒たちは発話の正確性を高めることができた。



2 研究協議 (指導助言)

小グループに分かれて、中間指導の在り方やALTの活用等について多くの意見を共有した。佐藤宏樹指導主事(東部教育事務所)からは、「台湾の学生との交流という状況を設定し、生徒が相手意識をもって課題に取り組めたこと」「ペアの組み換えを行い紹介の練習を繰り返してきたことで表現の幅を広げたこと」「ALTのリアルなコミュニケーションを活用しつつ、生徒の文法的誤りを適切に正す中間指導をしていたこと」について評価いただいた。また、個別最適な学びと協働的な学びの取り入れ方や、英語「で」学ぶ授業を組み立てることの大切さについて助言をいただいた。

3 部会協議

上市町立上市中学校の英語科教員が「明日から使える授業アイデア～授業が楽しみになる協議会～」と題して発表を行った。帯学習やwriting、readingの活動で生徒を飽きさせない工夫、生成AIを用いた業務の効率化といった、すぐに取り入れやすい実践的な内容が紹介され、有意義な研修会となった。

松崎 遥南 (滑・早月中)

富 山 地 区

(富・北部中)

1 研究授業

2学年では、宮越稀愛教諭とALTダニエル・ベイリー先生が、「相手の立場に立った、おすすめの日本食の魅力を紹介しよう!」という学習課題を設定し、紹介しようと思った日本食の選択理由や特徴等を伝え合う活動を行った。ALTの家族や友達等3人のビデオレターから得た情報に基づいて、それぞれの人に合わせて紹介する日本食を決めるという設定により、生徒は想像力を働かせ、ALTや友達を相手に活発にやり取りを行っていた。

3学年では、田邊理香教諭が、新しい言語材料を身に付けるというねらいをもって、「自分のあこがれの人や尊敬する人についてやり取りしよう」という課題を設定して授業を行った。クイズ形式をとることで、話し手は説明の構成を考え、聞き手は詳しい情報や話し手の考えを引き出すための質問をするなどして、どの生徒も意欲的に活動に取り組んでいた。また、ペアを変えて繰り返し活動し、その後全体の前で発表するという手順を取ったことにより、生徒は自信をもって発表できたと思われる。

2 研究協議 (指導助言)

2学年では、活発にコミュニケーションを行うための手立てについて意見交換した。「紹介する人数や情報量を調整することで、より焦点化した活動にできるのではないか」と意見が出された。島瀬容子指導主事(東部教育事務所)からは、「実在する相手からメッセージが届くという設定で、英語学習の必要感が高まり意欲の向上につながっていたこと」「英語を聞き取る目的を明確にする工夫があり、生徒が主体的に活動していたこと」「生徒の実態に合わせた活動の工夫」について助言をいただいた。

3学年では、やり取りをより活発にするための手立てについて協議した。聞く側に視点をもたせることや、英語でどう表現するかを全体で考える時間をとるなどのアイデアが出された。

宮城渉主任指導主事(西部教育事務所)からは、参考にしたい表現を紹介したり、間違いをタイミングよく指摘したりするなどの中間指導の在り方や、いつどのような力を身に付けるかというゴールを明確にすることの必要性等についてご指導いただいた。

志賀 靖子 (富・堀川中)

【研究主題】 コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか。
－聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して－

高岡地区

(高・志貴野中)

1 研究授業

天野恭子教諭とALTマレーナ・スタソス先生が、「マレーナ先生に日本文化の魅力を伝えるための表現を工夫しよう」という学習課題の下、3学年で授業を行った。ペアで日本文化を紹介する帯学習は、本時の課題であるスピーチ活動に関連付けられており、流れがスムーズであった。また、生徒たちは、表現の仕方が分からない英語表現を生成AIで調べたり、ALTの見本スピーチを参考に、文構成や表現を確認したりしながら、ペアで練習を繰り返した。マレーナ先生に日本文化を伝えたいという目的を明確にしたことが生徒の学習意欲を高めたと思われる。天野教諭は、日頃から生成AIを取り入れているが、あくまで自力で表現する力を付けるための補助的な利用と位置付けて指導している。本時では、①まず自分で英文を考えてから使う②自分が理解できる英文のみを使う③生成AIの英文がいつも適切とは限らないため、慎重に利用するなどのルールを設け、使い方を確認した後に生徒に使用を促した。生徒たちは日本語の文章をそのまま翻訳するのではなく、ルールに則って生成AIを活用していた。

2 研究協議 (指導助言)

部会協議では、授業のよかった点として、①生成AIの使用ルールが徹底されていたこと②ALTが例を示したことが、順序立てて説明するモデルとなっていたことが挙げられた。

宮城渉主任指導主事(西部教育事務所)からは、「生徒に使用させたい言語表現を先に教えるのではなく、言語活動を通して気付かせるなど指導を行うタイミングを考えること」「スモールステップを踏んだ手立てを工夫すること」等の助言をいただいた。

また、文教大学国際学部教授の阿野幸一先生からは、生成AIの活用について、パターンプラクティスの会話練習の相手として使用したり、スピーチや作文のフィードバックの際に用いたりすることが有効であること等、具体的な事例を交えながら教えていただいた。

宮林 裕子 (射・射北中)

砺波地区

(砺波・庄川中)

1 研究授業

樋掛香教諭とALTロジェネル・パンチョ・アロバ先生が、2学年で「とっておきの写真を見せながら、ロッジ先生に自分の職場体験について伝えよう～自分のスピーチをブラッシュアップしよう～」と学習課題を設定し、授業を行った。生徒は、伝えたいことについてマッピングで情報を整理して、教科書の既習表現を参考にしたり、帯学習の際に生成AIを用いた会話練習で習得した表現を用いたりしながらスピーチ原稿をつくった。その後、ペアを替えながら繰り返しスピーチを練習し、その都度、互いに助言し合っていた。生徒は、自分のスピーチが改善していることを実感しながら学習を進めていた。スピーチを再構築する場を設定することで、生徒は、よりよいスピーチになるよう主体的に活動していた。



2 部会協議 (指導助言)

部会協議①では、生徒の感じたことや学んだことを表現するための有効な手立てについてグループ協議を行った。「スピーチで伝える内容や助言について視点が示されていたことは、生徒が円滑に活動を進めるために有効な手立てであった」等の意見が挙げられた。

部会協議②では、リテリングを用いて、本文の内容理解を深める学習指導案をグループで作成した。本文中の下線を引いたキーワードを用いて英語で説明するように指導する等、支援の仕方について、今後の授業実践に参考となるアイデアが出された。

中神紘土指導主事(西部教育事務所)からは、「伝える内容のポイントが示されていたことや考える時間が確保されていたことにより、見通しをもって意欲的に活動できた」「個人の振り返りから生徒のつまづきを見取り、学級全体で共有することで、英語で表現する力がさらに高まる」と助言をいただき、今後の授業改善に向けて貴重な研修となった。

大窪 薫 (砺・庄西中)

各地区の取組から

砺波市中教研

砺波市中教研英語部会では、研究主題に基づき、各校で授業改善と指導法の工夫に努めている。授業では、言語活動を中心に据え、生徒が自ら考え、伝えようとする姿を引き出す工夫を行った。また、教材の内容や生徒の興味に合わせて、発表や意見交換等、多様なアウトプット活動を設定し、「英語を使ってできること」を意識した授業改善に努めている。

5月には、研究主題に基づく3学年の研究授業を行った。睡眠に関するアンケートや教科書本文の内容を基に、自分のこれまでの睡眠習慣を振り返り、これからどのように改善していくかをALTに伝える活動が提案された。協議会では、生徒が互いのスピーチを聞き合い、助言し合う中で自己調整する姿が見られたこと、英語が苦手な生徒のスマールステップを支えるヒントカードが有効であったこと等が共有された。協議会後の指導講話では、授業設計において目的や場面、状況を明確にし、それらに合わせて生徒が考えを再構築する場を設定することの重要性、言語活動を通して生徒が「必要感」をもって学ぶ姿勢を育てることの大切さが示された。さらに、英語が苦手な生徒にはスマールステップでの支援やヒントカードの活用が有効であること、教師がよいモデルとして英語を使い、生徒の理解度に応じた言語で支援することの重要性を教えていただいた。

今後も、共有した実践を基に各校が授業改善を重ね、生徒一人一人が英語を使って考え、伝え合う喜びを実感できるよう研究を進めていきたい。

渡辺 洋一(砺・庄西中)

南砺市中教研

南砺市英語部会では、研究主題に基づき、各校で授業改善と指導方法の工夫に努めている。今年度は、学びを育むため、リテリングにつながるための読み取りの活動の工夫について研究を進めた。Q&Aの答えとなる英文を読み取らせてリテリングの要点につなげる、本文の内容に関連した自分の考えをノートに書き留めておくなど、各校で実践を行った。

6月に、南砺つばき学舎を会場に、中田一希教諭による8年生の授業が提案された。「教科書を読み、ドキュメンタリーに使う3つ目の写真のタイトルと紹介内容を考えよう」という学習課題を設定し、スポーツを通して国際貢献をする目的について相手に伝えるために、教科書本文から要点を捉えるという授業であった。英語を使用する目的や場面、状況等が明確で、さらにタイトルを入れた写真をドキュメンタリー調の音楽に合わせて示すことで、生徒は意欲的に本文を読むことができていた。

授業後、①人物についての紹介文等の教科書本文の読み取りをする授業では、どのような課題を設定したら生徒が意欲的に課題に取り組めるのか②今回の授業でどこに音読練習を入れるのが効果的だったのか、の2つの視点に絞って協議を行った。特に、視点②では、「デジタル教科書やALTの協力も得ながら行う個に応じた音読練習は、英語が苦手な生徒も意欲的に取り組める工夫となる」「目的によって音読練習を設定する場面が変わってくるなど」等、様々な意見が挙げられた。

今後も、各校での実践を共有しながら研修を進めていきたい。

松岡 香苗(南・城端中)

小矢部市中教研

小矢部市中教研英語部会では、研究主題に基づき、各校で研究実践を重ねている。定例部会では教科書の指導法について実践例を紹介したり、意見交換を行ったりした。特に、目的や場面、状況の設定や英語が苦手な生徒に対する支援の在り方について議論し、考えを深めることができた。

小学校教員と英語専科教員、中学校の英語教員で構成する小矢部市英語推進委員会では、過去2年間富山大学大学院の岡崎浩幸教授を講師としてお招きし研修した。そこで学んだことの実践として、Small Talkに焦点をあてた授業を小中学校それぞれで行い、参観し合った。教員とALTとのSmall Talkを聞くことは、生徒が自然な形で授業のゴールやよいモデルを知ることになることや、生徒同士のSmall Talkを継続的に行うことは、意味のある言語活動の中でコミュニケーション能力を養うことにつながるということが分かった。

今年度の研修で共有した実践例やアイデア、Small Talkの取組の成果を次年度も引き続き活用し、授業力向上を図っていきたい。

金 智子(小・蟹谷中)